



僧4
775
92

大鏡卷之五目錄



謙德公

伊尹

恒德公

為光

大入道殿

兼家

已上九條殿息

忠義公 兼道

撰政

仁義公 公季



大政大臣伊尹の柁くこのおとく一条抄政より
こと九条殿一男おとくまはいつき御集は
くりてさようけとるのさあつり大臣をうさ
あつひして三年いつくして元禄二年十一月一日
あつひして御柔石十九日これ御徳をうけつた
いつくして柁く御さる事ハ九条殿御進言をた
くさせつたけとる人の中をうたれといさうさ
ておとくまはいつき御集の事とむらゝ御定よ
書とるせつたけとるさといさうさといさうさ
御集よといさうさを御集よといさうさの御
あつたてといさうさといさうさの事ハ

ひよくちいどひかたう中く心をはく
きり人よりはみどうたし一神一ればひ乃
ひのあまを法苑抄出くらははかやとせは権ちんぬ
ずれば水精きんせうのさうぞく一なるひんく一こもら
ひあうりりり出用さるものしんまかま
しつれおゆく一生精重く一めはふまうら
き事ぞく一あかしくあめ一るおゆふはれど
ふんぞくんはきをたつらゆかゆかゆか
こは及い出らたあかしくもあゆもさふ人やい
てたし一ゆかひんく一もまご一もさのしん
トウゆりまら一日一条大匠教りまのしんせは

ひよくあは梅乃木香乃いんはのりをらあ
てうらゆせはつりかこ出くはんく一かり
まら一と出を及一あうりたあはかかりて
いんまひんく一るりるら一もまかまこれい
あはくし一いんかひんく一もあひんく一はし
一いんあひのすおをいんく一たしんあはく教
のうくあまうりようぬり一かあせ一とあまいす
こ一いんく一ざんよあ一き人一とくたを一其義孝
がわもくうはく源中納言保光たけみつの女おしんく
あはくし一君ぞう一今のあは納言たけみつの世
てう記とのさうはふいあの一いんあ一た今

但馬守実澄まことの表をりり乃なつ権守良澄らうの君二人を恭精
之位乃女もせむひびくのわねの澄も又女君の入道
殿の由子きりまのつづの権中納言殿乃小方よとせむ
し心免君十五とせむひびきり又今れこの
うまひより乃君の心免りてねす又おなじめ君お
りまはるこの位は太納言殿とひびこのまけとを
まづ地下よねをせし時衆人難より流すたのまけ作と
めづりしとてよかそはは深成ふかの友は成りたなり
はつりしとてよかそはは深成の友は成りたなり
むかしなりとまはる人なり滅事よとせむし
かんありありありと流ひたれと一条流は流ぎに又ま
うなりしとてせむひびきとせむありありとあり

ありとて人よれと流せとせむひびきと地下のま
まいとありとて人の流せとせむひびきと
なまよものよ地下のまけとせむしとせむし
トもとせむしとせむしとせむしとせむし
うんよまきりしものよありとてやうなり人とせむ
しとせむしとせむしとせむしとせむしとせむし
まきりしとせむしとせむしとせむしとせむし
このまきりしとせむしとせむしとせむしとせむし
しとせむしとせむしとせむしとせむしとせむし
りしとせむしとせむしとせむしとせむしとせむし
まの歌の擧あがりよりと後乃頭ありとてせむし

せられ多きばさあし〜し〜のちりもあま〜
し〜し〜ちりもあま〜し〜し〜のちりもあま〜
りあま〜し〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
奉つし〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
ぞ〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
まけれい南敵よち〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
ひり〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
どうも〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
あ〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
版上の人〜し〜のちりもあま〜し〜し〜

く〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
あ〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
をい〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
又〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
ち〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
う〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
あ〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
う〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
さ〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
う〜し〜のちりもあま〜し〜し〜
ひ〜し〜のちりもあま〜し〜し〜

何一様なきかろしおまなましくも
と申さ勢強しつゝかむろくもゆつゝひばりものと
とくののまぬ風はるれたる物とくよあけぬまば
きと津車ぞひ乃かぎうよとやうきとえもの車乃
うしつたかこよりおりし海しとまきとけうかいとを
しとくかこしけあくねんたけしとまきとけうきとけ
むわしつとやいとくしとけうせあつれぬいと
太上天皇此はるはなごころとくも勢強しよとくかこ
むしつ民アな夜の津しひしはなごころとくねんたけ
すがよあろうとくしとけう私午にひつとく人の口との
むあろうとくゆふしとけうしとけうけぬまな

あつらえなむは月とそみとく一那まうやと
くもあつたれなるうとくこのはあつらぬよあつら
しよりけつとくもねんたけしとけうしとけうしと
きつとくまき冷泉疏よまうんか多とまうと勢強
とねんたけしとけう

よの中はゆつとくひとまきとけうのこ
とくしとけうとねんたけしとけう

とくしとけうとねんたけしとけう
この世はあつとくおんしとけう
あつとくねんたけしとけう津集りつらと

らるる人々かん一やと又なで一にたつゆとほい
ちのうく一いまをせびくこもはねのひらけをせり
よらうく一にたか一かたをなむたをなむか
きせらるる一をなむかひ一いふかたをなむか
一うし入道殿のくく馬せをせびひ一ねはひら
きせびひけらふら一あむかたをなむか
ひをきうあらをうくをりきとをあらねどそれ
はゆくもまをよは車たはぬ一をよふきうひな
くきうひ一らぬく一よらるるまをきと人乃足も
のよなるをうり一うのちのたよとあつて
ゆらうあてゆゑあつら一きう一は

けうあつてさうきりくもまをなむか
ぬ一せびひてあつてなむか
まるとふらせびひ一あつてなむか
まあまうりよ一か車にうらうらなむか
ゆら又まうんなのらなむか
てめかう一そちをねむか
一うあつてふら一又とく人まをうなむか
らけらうはなむか
ちぞあつてん一のまをなむか
力中よゆらん一まをなむか

くぞきし波流をうらむ日かどはいしあでいしんか
夢流ひしう高の殿は後ご夜ふりすくく次をほは
ふかよはきと今あらうしうきとぞきまのせとける
よむとまのりあふ夜とさるねとよひかりぞきまけ
くぞくれと流をらとせ流乃ぬのまじく六信をくぞ
りてまのらゆく夜とくひびののしとく流をら
もむつ乃うらうと物れやうしうしうけがあやうき
よくくきまきとれをまをむとくねとまよあけく
見流ふたれがきと乃がらうのかがまらうとく物う人
しよゆいまきとるうあふとあふまきとく人の福
あふゆりやと流うとらういとばやとくあふとく入

て冷泉院乃山とく流りをらうしうをわらうしうと
びくしとくいしうしうとくをらうしうあひしう
月しものうれとまきと流うしう人あふとらうと
かたゆえしうとあふとくしうとけるちか教生かみののり
乃これせき流流るのなまきとくまきとくむとけむとく事
あふとけしものしとまきとく或部あ々のまきとくひとれ見とく乃
中むとめらとくし流非とく圓融院乃出府の女おんなのし
流ひとく天延元年七月十一日所まきとくせ流ひとく
川の中まきとくしとく見とくむとまきとく流ひとくまきとく天延六
年六月二日流ひとくしとくむとまきとく流ひとくまきとく
とくはゆとくまきとくけとくまきとくの山向やの流ひとく

まはのふにききつゝも後珍ふりうおとま
くらあまのこころおとす又堀川乃移政殿の少佐郎
兵部々あるおきこの親王乃少将すあのをこは君中
の心とほりよおれを次これハ又周院乃おあき
ふりこゆーあまきこいこいおりーはよおれ
えよそこちとらもまをたれまきこは南ぞうひのが
どおやこおちかまきこめたおひたやまふひのすひこ
うのこすまはひのねのひあこいどおるなりが
まー此約奉よはうまうりお倉うーこのやかど
かといおつーあま口のむりうかやまそまらめど
まきまやいおつーいまはあまこまらめつー

くす人おれまひこゆるそあまはあこもま
あやふもくいどお勢おつーあまのらこあまお
ひーうまお中おらうなまこはやまひもまま
て大將もまおひこーそまらあかーうはこ
こお友大納言とまうけんき勢ーお款をどこいお
うこくあうりーまう甲午丑とせおひこいお方
まは原の内おれくまらおまおまおまおまおま
まのあまひめまおまおまーうーおまおま
おまおまおまおまおまおまおまおまおま
院の御所ままのまおまおまおまおまおま
おまおまおまおまおまおまおまおまおま

も大将のうらふ御りきりておののまねあり
よけしぬ関白教はまきりけりおののまねあり
きいし阿のまきりしにころ種月をこすひよゆりけ
りふありしとて病人歿して関白は頼忠れおと
赤之系及れとととりて小一系れおとれたの中細云
と大将よなまきりしに宣旨とて赤之系及れを
を御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
う御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
むりしが御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
りて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
事及りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて

あふふたの川及のむきり此世ふもゆりて
乃折しとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
おののまねありしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
もさしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
ひゆりしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
二乃折しとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
あふふたの川及のむきり此世ふもゆりて

一太政大臣乃光の御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
て七年法住寺の御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
十六日より御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて
恒徳とて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて御りしとて

入道殿乃ぞくよかきしゆしつらこの世子うきしう
せ給ひしうきと世を今世皇辰命しきつり世たすふ
この世とこれありうきふくなり多きしは後をぞ
いとゆきしうきとせきとせ給ふは後國白せき勢給
とぬ人乃世志とせきとせきとせきとせきとせきと
とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと

一太政大臣きんを念乃やと多きいまの宗院乃かきと
かきしうきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
しきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
うきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと

と一宗院乃世時此弘徽殿の女侍今よかきしゆしつら
とと一人と三時傍教如源とせきとせきとせきとせきと
一とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
つらとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
君乃今乃中女乃世を今乃世乃世乃世乃世乃世乃世乃
細とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
と今乃世の中女乃世を今乃世乃世乃世乃世乃世乃世乃
とたとせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと
とせきとせきとせきとせきとせきとせきとせきと

ら安政の事なる事や、さういふ事、この安政大
臣と、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
うがき、おぼえ、安政の事、さういふ事、
あ、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
君よ、おぼえ、さういふ事、さういふ事、
します、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
すも、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
ぞ、ゆり、あ、さういふ事、さういふ事、
も、ゆり、あ、さういふ事、さういふ事、
りの、法、師、よ、さういふ事、さういふ事、
り、さういふ事、さういふ事、さういふ事、

か、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
む、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
字、家、と、いふ事、さういふ事、さういふ事、
う、せ、安、政、の、事、さういふ事、さういふ事、
さ、安、政、の、事、さういふ事、さういふ事、
心、を、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
あ、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
さ、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
ま、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
よ、の、事、さういふ事、さういふ事、さういふ事、
原、さういふ事、さういふ事、さういふ事、

くは別當をばあつてうまひのうまひの
名ははくはあはれはた水院乃如神とく三宗院
彈正宮帥文乃由母とく三宗院はくはあはれとく
くはあはれとく三宗院はくはあはれとく
このうまひのうまひのうまひのうまひの
ふまのうまひのうまひのうまひのうまひの
まのうまひのうまひのうまひのうまひの
あつてはあはれとく三宗院はくはあはれとく
まのうまひのうまひのうまひのうまひの
まのうまひのうまひのうまひのうまひの

て自筆よあはれとく三宗院はくはあはれとく
うまひのうまひのうまひのうまひの
あつてはあはれとく三宗院はくはあはれとく
和泉武敏とあはれとく三宗院はくはあはれとく
あつてはあはれとく三宗院はくはあはれとく
りまのうまひのうまひのうまひのうまひの
武部乃あはれとく三宗院はくはあはれとく
あつてはあはれとく三宗院はくはあはれとく
はくはあはれとく三宗院はくはあはれとく
まのうまひのうまひのうまひのうまひの
あつてはあはれとく三宗院はくはあはれとく
りまのうまひのうまひのうまひのうまひの

君きく今姑入るどのよたきすは女後乃由母小方
の由も〜乃君達見と〜乃由ありき由りゆ〜ん
宣云乃由きんぢらち之平〜は笑〜す〜
けと〜乃ゆとは之道〜やよの人やきんえ〜も
経り〜す〜

文政十丁亥夏閏六月十日写之

中村直道

